

## 論文の内容の要旨

論文題目 南京国民政府の文化外交と『中国評論週報』グループ知識人の英文執筆活動:「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会」(1935-36)の開催をめぐる

氏名 範麗雅

1935年、イギリスのロンドンで「中国芸術国際展覧会」(以下「ロンドン展」と称す)が開催された。本研究は、この展覧会の準備・開催をめぐる、南京国民政府(1927-37)が実施した一連の文化外交活動と、『中国評論週報』と『天下』に関わる知識人たちの英文による中国文理解の文筆活動との関連性を解明することを目的とする。

「ロンドン展」は、英国の貴族銀行家であり、東洋美術品の愛好家でもあるパーシヴァル・デイヴィッド卿ら一部の英国人蒐集家の発案で王立芸術アカデミーによって、1935年11月28日から翌年の3月7日までバーリントン・ハウスで開催された。出品した文物は4,000点に近く、種類も考古文物から陶磁器まで、あらゆる美術品や工芸品を含んでいた。青銅器、書画、陶磁器、玉器など、それまで西洋人が目にしたこともないような類いの作品が国立北平故宫博物院などから集められた。その結果、「ロンドン展」は中国美術の研究に大きな刺激を与え、美術史研究を一新させた。英国のメディアも展覧会の図録もとりわけ故宫博物院からの国宝級の展示品に光を当てて、この企画が中国の政府と民間からの強い支持を得たことを強調している。

一方、南京国民政府にとって、「ロンドン展」は美術と政治との相乗効果により、予想を超える文化外交上の勝利を収めた一大国家企画となり、1935年の夏に行われた「イタリア美術展」に続く大規模な展覧会として、英国国際芸術展覧会史に記録を残している。

とはいえ、「ロンドン展」が中国政府にもたらした宣伝効果は、欧米諸国のマス・メディアが国宝級の展示品について数多くの記事や論説を掲載したことのみにとどまらない。より重要なのは、英語圏で中国の芸術文化全般を紹介する書籍の出版ブームをも引き起こしたことだった。なかでも同展の表舞台で中心的な役割を果たしたローレンス・ビニオンと、裏舞台から同展を支えたアーサー・ウェイリーの著述活動が注目に値する。彼らの著述によって、欧米の知識界は独特の創作法、鑑賞法および哲学理念を持つ古典書画に対する理解を深めただけでなく、中国の伝統文化の創出者であり担い手でもある文人階級の趣味生活に対する関心も日増しに高まった。

しかし、欧米の有力紙に掲載された記事、論説文およびビニオンやウェイリーら英国人学者の著述などを細かく検証してみると、1930年代という時点までは、これら知識人による中国の芸術文化の理解に、日本における中国絵画蒐集、即ち「古渡」、「新渡」という二つの大きな流れ、ならびにこれらを取り上げる日本人学者の英語と日本語による著述からの影響が顕著に見受けられる。確かに日本人学者の著述によって、ビニオンらの中国の文化芸術への理解は19世紀末頃の西洋人東洋学者と比較して深まっていた。しかし、その反面、日本所蔵の中国絵画や日本人学者の著述といったリソースを通して培われた彼らの中国理解には、誤った理解も多々認められる。そこから浮上してきた問題点は、温源寧、林語堂を中心とした『中国評論週報』グループの知識人と、海外で活躍した熊式一と蔣彝らの英文著述から浮き彫りにされる。すなわち、これらの問題点は、熊、蔣、林、温らが「ロンドン展」開催前後に西洋人読者に向けて英語による中国理解の文筆活動を展開する契機となった。この考えを前提として、本論文は以下の3部から構成される。

第1部は、「ロンドン展」の舞台である英国の文化界・東洋学界の動向と、20世紀初期に刊行された欧米人や日本人学者による中国文理解の言説の考察に基点を置く。第1章は「ロンドン展」開催の詳細な模様を紹介する。特に、同展の開催によって欧米の東洋学界と文芸界で中国の伝統的な芸術文化に対する再評価がいかに促進されたかを、『タイムズ』や『バーリントン・マガジン』など、英国の主要な新聞や雑誌に掲載された記事や論文を通して明らかにする。その上で展覧会開催の裏に隠された東西(中英)文化の衝突、とりわけ中国書画の展示法に現れた両者の価値観や美意識の相違に着目し、これらを19世紀末頃から「ロンドン展」の開催時までの欧米芸術の文脈における中国書画の蒐集・展示・研究史の枠組みの中で検討する。そしてこれらの相違点を生み出した英国文化史における東洋理解と、日本人学者の著述活動によってもたらした影響などを展覧会関係者の講演や論説を通して読み解く。

第2章と第3章は、「ロンドン展」の表舞台で活躍した詩人・芸術評論家であるローレンス・ビニオンと、裏から同展を支えた東洋古典の翻訳家であるアーサー・ウェイリーが20世紀初期に出版した代

表作に光をあて、その中国芸術理解における正・負両面を析出する。特にこれらの著述に潜む日本的要素に注目し、彼らの中国芸術論・文明論の形成に決定的な影響を及ぼした日本人学者の著述や出版物を取り上げ、ビニヨン、ウェイリーらとの相関関係を探る。最後に「古渡」から「新渡」へ、「日本の目」から「中国の目」へと推移していくウェイリーの中国絵画理解の軌跡を辿りながら、「ロンドン展」開催時にこれら英国知識人の「日本の眼」を通じた中国理解の言説、或いは彼ら自身のヨーロッパ文化中心主義的な見方によって生じた誤った中国理解が、いかに温や林らの英文による文筆活動を展開させるための契機になったかを提示する。

第II部では、近代中国知識人の視点から「ロンドン展」開催の意義を論証する。即ち国内の政治界と知識界の動きを軸に同展の開催に伴って浮上してきた、欧米人東洋学者の「西洋の眼」と「日本の眼」を通して中国絵画を解釈する講演や著述活動に対して、南京国民政府や知識界がどのように反応したかを分析する。

第4章と第5章では、英国滞在中に「ロンドン展」を身近に体験した中国人外交官や劇作家、書画家によって展開された外交・芸術活動について、関係者らの書簡や回想録、および当時の新聞記事などに基づきながら具体的に解析する。そして、彼らの活動に対して『中国評論週報』グループの知識人たちが行った評価を、同誌と『天下』に掲載された主な記事や書評を通して明らかにする。

第6章では国内にいる知識人の動向に着目し、主に「ベルリン展」と「ロンドン展」の開催を実現させた中国側の立役者である蔡元培や孫科の文化活動と、彼らを支えた『中国評論週報』グループの英文執筆活動を中心に検討する。特に林語堂以外のグループの重要なメンバーで、『天下』の編集長を務めた温源寧、同誌のマネージャー兼編集者の呉経熊、主な編集者・寄稿者の姚克らが同誌で展開した文筆活動に光を当てたい。まずこれらの知識人たちが執筆した英語論説は、林語堂による英文著述に語られた中国文明論と如何に呼応して補完し合ったのか、その様相を明らかにする。またビニヨンやウェイリーらの英国知識人たちが「ロンドン展」の開催前後に出版した中国文化理解の著述に対しても共感を示し高い評価を与えつつも、その一方で彼らの著書に潜む盲点や誤った認識を指摘し、より正しい中国理解を提示しようとした温、呉、姚らの試みも解明する。

第III部はこのグループの中心人物の一人である林語堂の国内外での文学・文化活動を取り上げる。林の著述活動を日中戦争のみならず20世紀初期の欧米や日本における新しい中国絵画群の「発見」から「ロンドン展」の開催に至るまでの長い時代の流れの中で検証し、彼の中華文明論の様々な側面に切り込んでいく。

第7章では、まず渡米前の『中国評論週報』での執筆活動が、後に林が英語圏で華やかな文

学・文化的活動を繰り広げるための準備期であったことを明らかにする。そして同誌を通してパール・バックと出会い、その後両者の間に交わされた知的交流の結果、林が「文明化された中国像」を描く『吾国与吾民』のアメリカにおける出版へと至るまでのプロセスを辿る。その上で欧米の主要な新聞や雑誌に掲載された代表的な書評を読み解くことで、「満洲事変」や「ロンドン展」を経て中国・中国文明への関心がさらに高まる中で、林の英文著書で描かれた「中国像」が欧米の読書界に受け入れられていく様相を解明していく。

第8章は渡米後の林一家とバック夫妻との交流を扱う。主に『アジア』での執筆・編集の活動やバック夫妻主宰の様々な文化的・社会的な活動に林自身がいかに主体的に携わったのか、またそれが『生活の芸術』や『北京好日』などのベストセラーの出版と、これらの出版によって戦時中の英語圏に与えられた林語堂への高い評価などにどのように繋がっていったのかを分析する。

第9章では、林に世界的名声をもたらした『生活の芸術』の出版と欧米の文芸界での評価について論じ、第二次世界大戦中に英語圏の読書層がこの書物を熱烈に受け入れた理由と、実際には本書がどのように読まれたのかという点について、代表的な書評を読み解きながら明らかにする。

第10章では、林の長編英語小説『北京好日』を取り上げ、彼がいかにして中国文明の全体像を小説特有の手法に拠りながら、絵巻物のように欧米の読者に提示したのかを検証する。そして、この小説を以て、林がエッセイストから雄大で叙事詩的な小説を創作する小説家へと脱皮し、英語圏で「西洋に向ける古の中国文化の解説者」としての地位を確立していく過程を辿ることで、本論文の結びとする。